飯

岡

飯岡町

幻の佐貫城址①

義経伝説絡んだ領主

中世の鎌倉時代にあったと伝えられる佐貫城跡は、既に海中に没しているという。いったいどこにあったのか、郷土史家の意見はさまざまである。

城址は現在の名洗から飯岡の刑部岬（ぎょうぶみさき）の間、つまり屏風ヶ浦にあったことは確かである。「海中に没している」という説だが、その形跡はないという。

最も、中世から銚子周辺の海岸線の陸地は年々浸食され、長い年月を経て陸地は想像もつかないほど後退して城があったとしても海底の砂に埋もれているはずだ。

佐貫城のことは銚子市史に義経伝説の記述は若干あるものの、城址の所在や概念は不詳とされ記述はない。しかし飯岡町で建立した「屏風ヶ浦と刑部岬」の案内板にはその断崖について次のように書かれている。

「太平洋の荒波が直接打ち寄せるため、その浸食により形成されたもので、七百年余りの間に約六キロ米近く陸地が後退したといわれています。平安時代末期には、この地に源義経の四天王の一人、片岡常春が佐貫城を構えていたが、その城址は激しい海食による海岸線の後退で、今では海中に没してしまい、昔の姿はありません。わずかに地名でサヌキとし残っております」と記してある。

佐貫城について海上郡誌は「東国古戦記」（江戸時代、飯岡町の郷土史家・石毛集人著）を引用、抜粋して、

かなり詳しくこの関係を記している。

また、飯岡町史にも更に詳しくこの関係を掲載している。

佐貫城主は中世、三崎庄（現在の銚子市、飯岡町、海上町）を領していた片岡常春としている。

常春がどんな人物かについては同郡誌によると「常陸の鹿島の産で三崎庄を領し源氏に屈せり」とある。

文治元年（一一八五年）の「吾妻鏡」（鎌倉時代の史書・五十二巻＝鎌倉幕府の事跡を記した日本最初の武家記録）のなかに「片岡次郎常春同心佐竹太郎有謀叛企之間被召放彼領所下総国三崎庄」とあり、また、文治五年（一一八九年）に「片岡次郎常春、依有寄謀之聞、難召放領所―下総国三崎庄舟木、横根、如元被返付之處、沙伏人―。以日者之融令忽緒之由、訴申之聞。可停止之旨。被仰下云々」とある。

要約すれば三崎庄は片岡常春の所領であったが、源氏一族の佐竹太郎義政と組んで陰謀の疑いを頼朝からかけられた。

これによって三崎庄は頼朝によって没収され、千葉常胤に与えられた。

（後に再び三崎庄は常春に返されるが、最終的には常胤の所領になる）

常胤は六子の東胤頼に下賜し、更に海上氏に譲った。

佐貫城はどんな城であったのか――その詳細は不詳だが、東国古戦記によると「谷北より東西に廻り、追手（表門）は西南にあり、坂道二町下り川（多分、磯見川と思われる）あり、この川西より東に落ち南へ廻り、さらに西に落ちて城を巻き鳩崎、龍王崎、刑部岬の三つに分かれ海上に差し出て切り岸高く、農民、里村数多く、北は谷を隔てて東に向き、搦手（からめて＝裏門）荒井丹波守が砦を構へ、西は水の手、扇縄で鬼越刑部左衛門の砦あり、所々の切所には乱杭、逆木を結び大木を切断し、要害堅固に構え置く」と記してある。